

残り
2セット

明治期グリム童話翻訳集成 全5巻

川戸道昭・榊原貴教 編

B5判・上製・総 1,550 頁・各巻口絵 1 頁 全 5 巻揃 4-901061-05-4 88,000 円

[企画：ナダ出版センター、発行：アイ アール ディー企画 1999.9 刊]

■明治期グリム童話の翻訳を、初期に翻訳されたもの、雑誌に掲載のものを中心に復刻（明治期に訳された約 300 点から 167 点を集録）。全翻訳作品の「KHM 分類別翻訳一覧表」「翻訳文学年表」を付す。



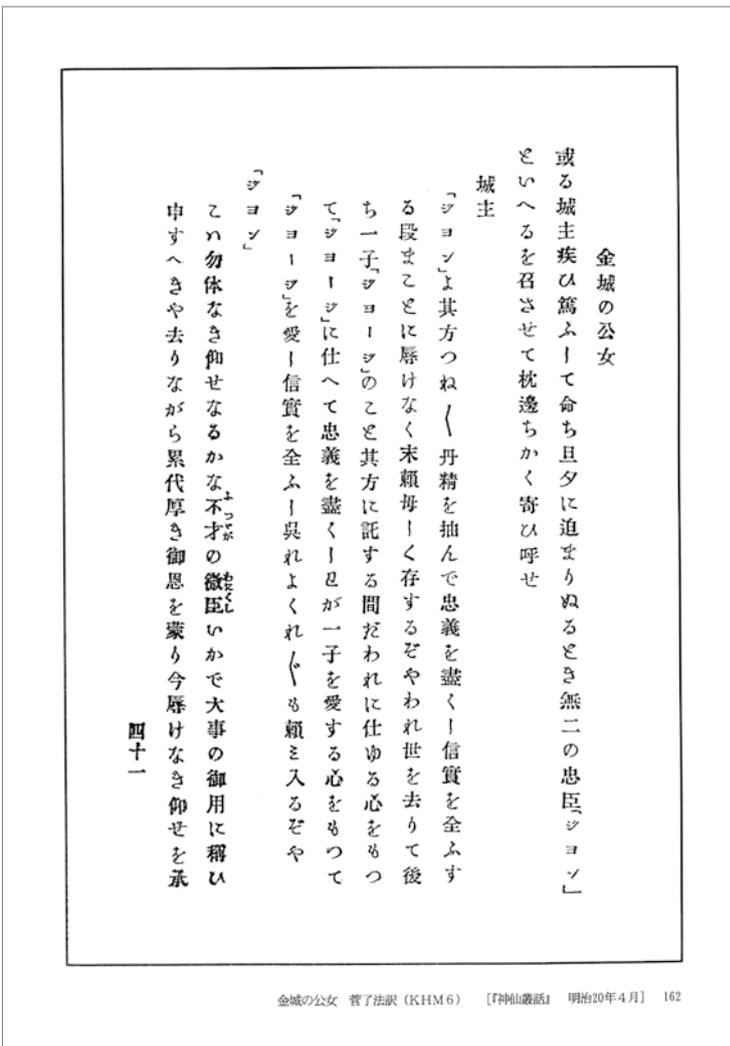
●明治期のグリム童話翻訳の経緯をたどると、おおよそ三つの流れがある。一つは、最初の翻訳者である菅了法訳『西洋古事 神仙叢話』や渋江保訳『西洋妖怪奇談』のように、西欧世界を理解する系譜として現れた。もう一つの流れは、「女学雑誌」に紹介されていったものを読むとわかるが、西欧の上流社会を模倣した母親の子どもに対するしつけの物語としてグリムが受容される。この系譜はその後、婦人雑誌に継承されていった。三つ目の流れは、子どもに直接語りかける物語として「小国民」「幼年雑誌」「少年世界」などに意識・翻案され紹介された。このうち、西欧世界理解の系譜は歴史的役割を終えて影を薄くし、子どもに直接語りかける童話は、巖谷小波のお伽噺や小川未明の童話文学の登場により創作童話へと脱皮していった。そして、二十世紀の日本児童文学の母体となった。しつけの物語としてのグリム童話が、教育制度の確立により、学校教育の中で普及し定着していくことになる。

それから一世紀経つ。教育という啓蒙活動そのものが問われ始め、グリム兄弟によって完成された模範的な民話、すなわち日本人にとってはしつけの物語として定着してきたグリム童話に対する認識に揺れが生じた。グリム童話の初原を求めて、ヨーロッパ近代から中世への民俗的な心の旅がここから始まった。この旅の目的は、グリム童話改訂への関心という形で現れたが、実際はグリムを受容する日本人の意識がどのように変容してきたかという日本人自身の問題に行き着くように思われる。それは変化の究明というより、アイデンティティの模索といえよう。いま私たちはグリムを通して、一世紀余の西洋受容と日本児童文学構築のありようを再検討する最良の時代に遭遇したのかもしれない。

（はじめに抄）

【参考】
グリム童話 4 話の明治期に翻訳された作品リスト。☆は『翻訳集成』に収録されて、掲載の形で読むことができる。

*本集成の全収録作品はホームページに掲載しています。



金城の公女 菅了法訳 (KHM6) 【『神仙叢話』 明治20年4月】 162

- ☆明 24・8 シンドレラ嬢奇談（即ち泰西皿々奇談）（渋江保訳『西洋妖怪奇談』）
- ☆明 32・8 踊靴（白雨楼主人訳『少年世界』）
- 明 42・3 真珠姫（和田垣謙三・星野久成訳『家庭お伽噺』）
- 【「ブレメンの音楽隊」(KHM27)】
- ☆明 26・1 街道音楽（西翁訳『小国民』）
- ☆明 35・1 ブレメンの音楽師（ともる訳『少年世界』）
- ☆明 36・3 ブレメンの音楽者（三槐生訳『心の花』）
- ☆明 38・11 ブレメンの町音楽師（山君訳『心の花』）
- ☆明 41・10 市街音楽者（木村小舟訳『教育お伽噺』）
- 明 42・3 芸は身を助く（和田垣謙三・星野久成訳『家庭お伽噺』）
- 明 42・12 獣類の音楽家（百島冷泉訳『グリムお伽噺』）
- 明 43・9 旅楽師（近藤敏三郎訳『グリムお伽噺』）
- 【「白雪姫」(KHM53)】
- ☆明 29・4 小雪姫（巖谷小波訳『少年世界』）
- ☆明 37・3 雪姫（教育資料研究会訳『話の泉』）
- 明 39・3 小雪姫（橋本青雨訳『独逸童話集』）
- ☆明 39・5 雪姫（山君訳『心の花』）
- ☆明 41・10 雪姫物語（木村小舟訳『教育お伽噺』）
- 明 41・12 雪姫（寺谷大波訳『世界お伽噺第9』）
- 明 41・12 雪姫（水野繁太郎・権田保之助訳注『独逸文学叢書』）
- ☆明 44・2 白雪姫（くすを生訳『新女界』）

日本におけるグリム童話翻訳書誌

(翻訳研究・書誌シリーズ1)

川戸道昭・野口芳子・榎原貴教 編著

A5判・上製・254頁 4-931522-07-6 3,500円

[ナダ出版センター 2000.7刊]

2024年8月1日 現在

残り
1冊

■一つの童話が他の社会に伝播されるとき様々な変移をもたますが、グリムのメルヒェンはその典型である。

[研究編]

川戸「グリム童話の発見 日本における近代児童文学の出発点」

野口「改変された日本の『白雪姫』：明治から現代まで」

中山淳子「『狼と七匹の子山羊』の謎」

虎頭恵美子「日本におけるグリム翻訳書誌 明治期のグリム童話の本邦初訳について」

[年表編]

グリム童話翻訳年表(明治編、大正以降現代まで)

グリム童話 KHM 分類目録



明治19年(一九八六)	4月 羊飼いの童(原文 ROMAI ZASSHI(10回) [152] 牧童) カタヤマ キンイチロウ訳
明治20年(一八八七)	4月★西澤 菅了法訳 神仙童話
菅了法訳	「仙禽を逐ふて公子金城に入る(57) 黄金の鳥 / 活殺自在の術(81) のんきぼうず」 ／履師怪を見る(39)1 まほうをつかう一寸法師 一番目の話 / 金城の公女(6) 忠臣ヨハネス) / 十二の公女仙家に踏舞す(133) おどりぬいてほろほろになる靴 / 公女メリーの節操(9) 十二人兄弟 / 三公子仙窟を探ぐる(62) 蜂の女王 / 仙子の名附祝ひ(39)2 まほうをつかう一寸法師 二番目の話 / 三線の金髪(29) 金の髪が三本はえてる鬼 / 王子獅子の形ちをうく(88) なきながらびんびん跳ぶ(ひばり) / シンデレラの奇縁(21) 灰かぶり) 収録」
本書の書誌を記しておく。 18cm 目次2+145+奥付2+広告14p 挿絵2葉。東京	集成社書店

- 「狼と七匹の子山羊」(KHM5)
- ☆明20・9 八ツ山羊(呉文聡訳 『西洋昔噺』)
- 明22・9 狼と七匹の羊(西翁訳 小国民)
- 明22・10 おほかみ(上田万年訳 『家庭叢話』)
- ☆明28・8 子猫の仇(巖谷小波訳 少年世界)
- ☆明37・3 伶俐な山羊(教育資料研究会訳 『話の泉』)
- ☆明37・10 羊の天下(巖谷小波訳 少年世界)
- ☆明41・10 狼と七匹の子山羊(木村小舟訳 『教育お伽噺』)
- 明42・12 狼の計略(百島冷泉訳 『グリムお伽噺』)
- 明43・9 狼と七匹の山羊仔(近藤敏三郎訳 『グリムお伽噺』)
- 明44・2 狼と七匹の犢牛(日野蕨村編 『ドイツお伽噺』)
- 「灰かぶり」(シンシアラ) (KHM21)
- ☆明20・4 シンデレラの奇縁(菅了法訳 『神仙童話』)